

夫婦のコミュニケーションが 関係満足度に及ぼす影響 —自己開示を中心に—

伊藤 裕子*・相良 順子**・池田 政子***

Key Words: コミュニケーション, 自己開示, 夫婦関係満足度, 子育て期, 中年期

本研究は、夫婦のコミュニケーション、なかでも自己開示が、夫婦関係満足度に及ぼす影響を、子育て期と中年期夫婦を対象に明らかにすることを目的とした。調査では、793組の夫婦に、会話時間、自己開示、夫婦関係満足度が尋ねられた。結果から、次の点が明らかになった。第1に、妻は夫以外にも、友人や職場の人に自己開示するが、夫は妻以外、親しい人に自己開示することは少なく、特に中年期の夫でそうだった。第2に、妻は夫と夫以外の親しい人への自己開示を区別しているが、夫ではその違いが少なく、妻と他の親しい人への自己開示は一貫していた。すなわち、妻に自己開示する夫は他の親しい人にもそうであり、妻に自己開示しない夫は他の親しい人にも開示しない傾向がみられた。第3に、夫婦のコミュニケーション（会話時間と自己開示）は妻の夫婦関係満足度を大きく左右し、とりわけ子育て期ではそうだった。第4に、夫では妻ほど夫婦のコミュニケーションが関係満足度に影響しないが、中年期では妻への自己開示が関係満足度を大きく規定していた。男性の自己開示がジェンダー役割の観点から論じられた。

問題と目的

一般に既婚者にとって、配偶者との良好な関係は、精神的健康の十分条件とはいえないまで

本研究は、平成13～14年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）（1）13837026、研究代表者：伊藤裕子）の助成により行われた。なお、研究の一部は日本心理学会第66回大会（2002）において発表された。

* 人間学部心理学科

** 聖徳大学

*** 山梨県立大学

も必要条件だといえよう。例えば、配偶者からの情緒的サポートは夫の疎外感を低減し（伊藤・池田・川浦, 1999）、妻のディストレスの低減にも直接作用していた（稲葉, 1999）。また、配偶者への愛情は抑うつ性の低さと結びつき（詫摩・八木下・菅原・小泉・菅原・北村, 1999）、夫婦関係の良好さの認知は、自尊感情や健康度より主観的幸福感を大きく左右していた（遠藤, 1997）。

このように精神的健康やディストレスの低減に良好な夫婦関係は不可欠だが、結婚満足度あるいは夫婦関係満足度を規定する要因として、例えば、本人および配偶者の健康（岩井, 2002；木下, 2004）、ショッピングやレクリエーションでの夫婦の共同行動（木下, 2004；菅原・詫摩, 1997）、また妻においては、家事分担の公平さの認知や（木下, 2004；諸井, 1996；Shelton, 1996）、家計収入（伊藤・池田・相良, 2003；数井, 1995）などがあげられる。

なかでも夫婦のコミュニケーションは、夫婦関係を構成する重要な要素として位置付けられる。アメリカでは、夫婦間の相互性とコミュニケーションの欠如は関係の終わりを意味するといわれ（Vannoy, 1996）、夫婦間コミュニケーションにおける満足は、他の領域に比べ結婚満足度の重要な予測因子であるという（Jacobson & Moore, 1981）。同様のことは、日本の調査結果からも指摘できる。配偶者への全般的な満足に寄与する要因をみると、男性では「家事分担」や「自分の就労への理解」が、女性では「生活設計」や「配偶者の就労観」が関係していたが、群を抜いていたのが男女とも配偶者との「コミュニケーション」だった（生命保険文化センター, 1995）。

このように夫婦のコミュニケーションは夫婦関係満足度を予測する重要な要因といえるが、「日本では、夫婦間コミュニケーションの不足・不全の問題が経験的・評論的に指摘されることは多いが、夫婦間コミュニケーションの内実には焦点を当てた実証的研究の蓄積は少ない」といわれる（柏木・平山, 2003, p.97）。そのなかで平山・柏木（2001）は、中年期夫婦を対象に夫婦間のコミュニケーション様態を明らかにし、ポジティブな態度として「共感」「依存・接近」、ネガティブな態度として「無視・回避」「威圧」の4因子を抽出し、前者は妻に、後者は夫に多くみられることを明らかにした。また、夫婦のコミュニケーションパターンでみると、共感親和群が平均中立群および威圧回避群より妻・夫ともに結婚満足度が高かった（平山・柏木, 2004）。さらに難波（1999）は、2組の中年期夫婦の語りの分析から、夫のコミュニケーション行動の特徴として、「妻との“つつこんだ話し合い”を避ける」こと、「妻の言うことが気に入らなければ、黙る・怒る・席を立つ・無視するなどコミュニケーションを一方向的に中断させるなどの特徴がみられる」（p.74）ことを報告し、葛藤場面での夫の撤退行動が他の事例でも多く報告されていることを指摘している。

しかし、コミュニケーションのもち方もさることながら、コミュニケーションの基盤となる会話時間そのものが必ずしも十分に確保されていないことが問題である。筆者らが行った2つの調査とも、夫婦の会話時間の最頻値は「30分～1時間」で、子育て期、中年期とも「30分以下」が3割に達する（伊藤ほか, 2003；川浦・本田・池田・伊藤, 1993）。特に子育て期にお

いては、女性は出産退職あるいは育児休業によってそれまでの社会生活から切り離され、コミュニケーションする相手が配偶者に限定されがちである。これまで多くの研究から、妻の育児不安や育児ストレスの低減に夫の情緒的サポートが有効といわれているが（稲葉, 1999；村松, 2006；徳田・伊藤, 2004；ほか）、情緒的サポートと同様あるいはそれ以上に、夫との会話時間の確保が、子育て期の妻にとって疎外感を低減することに繋がることを伊藤・ほか（1999）は明らかにしている。

近年、既婚女性の就業率が高まったとはいえ、我が国は今日でも出産・育児期には離職して家庭に入り、子育て後に再就職するM字型就業を示すため、子育て期には特に妻と夫で役割を分業化しがちである。そのため子育て期の妻にとって夫とのコミュニケーションへの渴望は強く、子どものことを中心に、自分のことや将来のこと、現在の心情などが話されている（徳田・伊藤, 2004）。これに対して中年期では、子どもに関する話題は子育て期に比べて減少し、代わって互いのその日の出来事や仕事のこと、社会の出来事、住まい・料理などが話題にされている（サントリー不易流行研究所, 1999）。このように子育て期と中年期では会話内容が異なるのはもちろん、夫婦関係においてコミュニケーションが果たす役割も異なることが考えられる。先にみたように、日本では夫婦間コミュニケーションに焦点を当てた研究は緒に就いたばかりで少なく（平山・柏木, 2001, 2004；難波, 1999）、他に社会学の分野で散見される程度で（門野, 1995；施, 2000）、子育て期と中年期を同じ指標を用いて、同じ枠組みで比較したものはない。そこで本研究では、夫婦のコミュニケーションが夫婦関係満足度に及ぼす影響を、子育て期と中年期で比較することを第1の目的とする。その際、夫婦をペアとして扱い、個人内での影響のみならず、夫婦間のクロスオーバーな影響の検討を試みる。

次に、第2の目的として、夫婦のコミュニケーションを、物理的量としての会話時間と心理的量としての自己開示の2側面からとらえ、その性差と夫婦関係満足度に及ぼす影響の差異を明らかにする。夫婦の会話時間についてはこれまでも多く研究されているが、夫婦関係の質に対する総合的評価（土倉, 2005）や疎外感（伊藤ほか, 1999）など、会話時間が及ぼす影響が特に妻の側に顕著であることが報告されている。しかし、自己開示については、大学生を中心とした青年期の研究がほとんどで、夫婦間の自己開示を扱った我が国の研究は、母親の育児不安と自己開示、ソーシャルサポートとの関係をみた徳田・伊藤（2004）が散見される程度である。

自己開示の性差については、内外の研究をレビューした榎本（1997）によれば、身近な人々に対する日常の自己開示を問題にする場合は、女性の方が男性より開示度は高く、それほど親しくない人や初対面の実験的状況での自己開示を問題にする場合は、性差がない、もしくは男性の方が開示度が高いという。しかし、一般に自己開示を問題にする場合は何らかの知己に対してである。稲葉によれば、概して、男性は他者に自己開示したり、感情表出することが抑制され、否定的に評価される（Pearlin & McCall, 1990）ため、男性が自分のネットワークの中で自己開示や感情表出できる親密な関係をつくることは難しく、可能な場合は数少ないネッ

トワークの中の女性，すなわち配偶者や恋人に限定されるという（稲葉，2004）．それゆえ，特に既婚男性にとって配偶者への自己開示がどのような意味をもつのか，自己開示を通してみたソーシャルネットワークの中での配偶者の位置について，ジェンダーギャップの視点から明らかにしていきたい．

方 法

調査対象と方法

調査対象は，子育て期と中年期という2つのライフステージ上の夫婦を対象とした．調査方法は，子育て期夫婦は小学生（1～6年生）を，中年期夫婦は大学・短大生を通じ学校にて調査票を配布し（約1880組），回収は，子育て期Ⅰは全て郵送（回収率28.1%），子育て期Ⅱは子どもを通じて（回収率58.6%）¹⁾，中年期は主に学生を通じて（一部郵送，回収率65.2%）回収した．なお，夫婦間の回答の独立を保つため，回答後すぐ封の出来る別々の封筒に調査用紙を入れ，2通1組として配布した²⁾．有効票は子育て期女性525名，男性352名，計877名，中年期女性522名，男性483名，計1005名，総計1882名だった．

調査時期は，子育て期Ⅰは2002年6～7月，Ⅱは2003年2～3月，中年期は2001年6～7月である．

分析対象と属性

本研究では夫婦単位の分析を行うので，得られた有効票のうち，妻票・夫票が揃っている793組（子育て期337組，中年期456組）1586名を分析対象とした．

平均年齢は，子育て期の妻38.3歳（SD4.4），夫40.5歳（SD6.2），中年期の妻47.4歳（SD3.8），夫50.2歳（SD4.4）だった．平均結婚年数は，子育て期12.5年（SD3.6），中年期22.5年（SD3.3）だった．妻の就業形態は，子育て期がフルタイム16.0%，パートタイム32.6%，自営・家族従業9.5%，無職38.9%，その他・不明3.0%，中年期ではそれぞれ24.1%，37.3%，14.0%，23.2%，1.3%だった．夫の職業は，両期を通じ会社員64.0%，公務員14.6%，自営業（農業を含む）15.6%，その他・不明5.8%だった．

測 度

分析に用いる測度は以下の5種である．配偶者への自己開示は夫婦間コミュニケーションの心理的側面として，夫婦の会話時間は物理的側面としてとらえられ，それらを夫婦関係満足度の説明変数とした．なお，コミュニケーションスキルおよび夫婦の心理的共有度は自己開示尺度の基準関連妥当性として用いた．これらの測度は，既婚者の結婚生活・職業生活に関わる多岐にわたる調査の一部である．

自己開示 自己開示尺度は，Jourard & Lasakow（1958）をはじめ，我が国でもいくつかの尺

度が開発されているが（榎本, 1987；渋谷・伊藤, 2004）、大学生を中心に青年を対象としたものが多い。自己を開示するという場合、調査する対象によって取り上げる話題が必然的に異なるため、既婚者を対象とした簡便な尺度が見当たらなかったため尺度を開発した。

開示する相手は配偶者を含む身近な人物を想定し、開示内容として「自分のこと」「家族のこと」「職場のこと」の3領域に各2項目を配し計6項目とした。開示対象は、配偶者、職場の親しい人、（職場以外の）親しい友人について尋ね、回答は「4：よく話す」「3：ときどき話す」「2：話したことがある」「1：まず話さない」の4件法とした。教示は次の通りである。「あなたは普段、あなたの配偶者（職場の親しい人、親しい友人（職場以外））に話したり、相談したりすることがどの程度ありますか」。

開示内容のうち、家族と職場については、該当しないために「話さない」という回答と区別するため、「該当しない」という欄を設けた。ただし、「該当しない」の扱いに関しては、その開示量に「該当しない」と回答した項目を除いた残りの項目の項目平均を充てた。項目内容は表1に示す通りである。

会話時間 夫婦の1日のおよその会話時間を5件法で尋ねた。「1：ほとんどない」「2：1日30分以下」「3：1日30分～1時間」「4：1日1時間～2時間」「5：1日2時間以上」である。

コミュニケーションスキル 菊地（1988）が作成したソーシャルスキル尺度 KISS-18 から、川浦ほか（1993）がコミュニケーションスキルに関する12項目を抜き出し使用したものを用いた。ただ、そこでこの12項目を主成分分析したところ、負荷量の低い項目が2項目みられたのでこれを除き、本研究では10項目を使用した（ $\alpha = .89$ ）。回答は「4：いつもそうだ」～「1：いつもそうでない」の4件法である。

夫婦の心理的共有度 渋谷（1994）が夫婦カウンセリングの場で用いている、夫婦の関わり合い方を境界図として描いてもらう非言語的方法を参考にした。直径2cmの円を自分の領

表1 自己開示尺度：対象ごとの主成分分析結果

	配偶者 (N=1567) $\alpha = 0.836$	友人 (N=1546) $\alpha = 0.872$	職場の人 (N=1246) $\alpha = 0.867$
1.最近うれしかったこと、楽しかったこと	.759	.796	.772
2.将来のこと（老後を含む）	.785	.811	.815
3.子どものこと（成長のようす、悩み、進学など）	.758	.828	.818
4.親のことで悩んでいること	.696	.738	.709
5.自分の処遇、配置・昇進、リストラ	.776	.777	.776
6.職場の人間関係	.734	.751	.759
主成分の2乗和	3.392	3.690	3.612
寄与率（%）	56.533	61.492	60.192

域として、相手と共有してもよいと思う部分（受動的共有）、および相手の空間の中で自分が共有したいと思う部分（能動的共有）をそれぞれ5段階で変化させ（2つの円の共有部分が異なる5種を提示）、受動的共有、能動的共有の各々のレベルを選択させた。

夫婦関係満足度 結婚生活・夫婦関係を総合的に評価するものとして単一指標による夫婦関係満足度を尋ねた（「ご夫婦の関係について、現在の満足度を10点満点で評価して下さい」）。回答は「1：全く満足していない」～「10：たいへん満足している」の間の当てはまる数字に○をつけるものである。評定を10段階としたのは、単一指標のため測定の精度を高めるためである。

結 果

1. 配偶者への開示

妻と夫がその配偶者に、日頃どのようなことをどの程度話すかについて、自己開示の項目ごとに性とライフステージ（検定では“ステージ”と略記）を要因とする2要因分散分析を行った。結果は、図1に示す通りである。

「最近うれしかったこと・楽しかったこと」ではステージ差はなく、性差のみで（ $F(1,1563) = 37.12, p < .001$ ）、妻がよく話しているが、夫もこの話題では妻によく話す。「将来のこと」もステージ差はなく、性差のみだった（ $F(1,1563) = 16.61, p < .001$ ）。「子どものこと」ではステージ差（ $F(1,1563) = 11.31, p < .001$ ）および性差（ $F(1,1563) = 93.60, p < .001$ ）がみられ、子育て期は中年期より、妻は夫より多く子どものことを話題にしていた。「親のことでの悩み」ではステージ差（ $F(1,1563) = 24.69, p < .001$ ）および性差（ $F(1,1563) = 46.44, p < .001$ ）

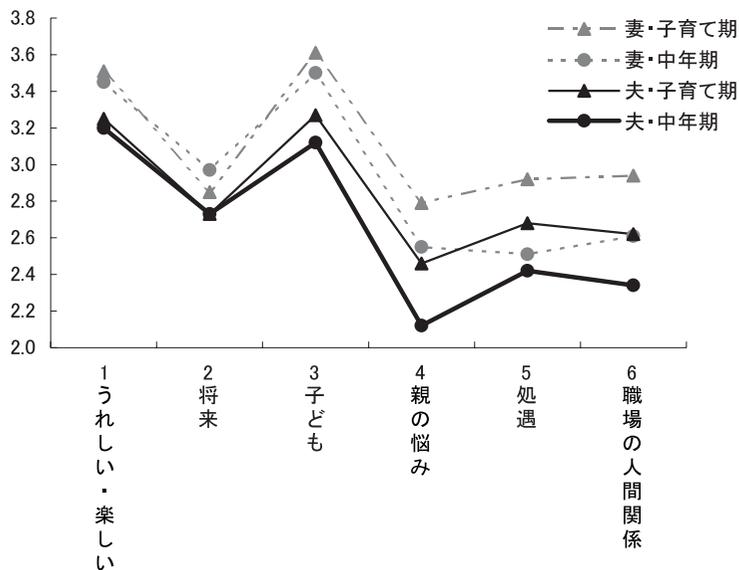


図1 項目別・配偶者への自己開示

がみられ、子育て期は中年期より、妻は夫より多く親のことを話題に取り上げていた。「自分の処遇、配置・昇進、リストラ」では、ステージ差 ($F(1,1300) = 24.45, p < .001$)、性差 ($F(1,1300) = 5.19, p < .05$) が、「職場の人間関係」も同様にステージ差 ($F(1,1300) = 22.28, p < .001$)、性差 ($F(1,1300) = 19.89, p < .001$) がみられた。なお、いずれにおいても交互作用はみられなかった。

以上より、自己開示のどの内容においても性差は顕著で、妻は夫より多く話していた。特に、子どものこと、親のことでは性差もライフステージによる差も大きく、家族に関わる話題では妻の会話量が圧倒的に多く、また、中年期より子育て期の方が妻・夫とも多く話していた。職場のことでは、性差もみられたがライフステージによる差の方が大きかった。一方、自分に関わる話題ではライフステージによる差はみられなかった。全体に、中年期の夫の開示の低さが際立っていた。

2. 自己開示尺度の検討

自己開示度の指標を得るため、自己開示3領域6項目について尺度の検討を行った。開示対象（配偶者 (N = 1567)、友人 (N = 1546)、職場の人 (N = 1246)) ごとに主成分分析を行い、表1に示すように、いずれの対象においても主成分負荷量は6項目全て.70以上あり、累積寄与率も56.53～61.49%と十分な値を示した。 α 係数は、配偶者が $\alpha = .84$ 、友人 $\alpha = .87$ 、職場の人 $\alpha = .87$ で、項目数は少ないが十分高い値といえ、尺度の信頼性は示された。

次に、基準関連妥当性について検討を行った。親しい人への自己開示においても、コミュニケーションスキルが高い方がよりスムーズに開示できると考えられる。表2は、各開示対象への自己開示とコミュニケーションスキルとの相関を示したものである。中年期では、いずれの開示対象においてもコミュニケーションスキルとの安定した相関がみられ、スキルの高い方が開示しやすいといえる。それは配偶者に対しても同様である。一方、子育て期では少し様相を異にし、中年期に比べると相関が低い。特に、妻における友人への開示では、スキルとほとんど相関がみられない。子どものことを中心とした友人との“おしゃべり”は、その欲求の強さから、スキルの有無にかかわらず会話が交わされていると考えられる。

一方、配偶者への自己開示に限定してみると、夫婦の心理的共有度、すなわち配偶者に対する自己の開放性という点から、表3に示すように、自分の領域の中で相手と共有したい受動的共有、相手の領域の中で自分が共有したい能動的共有のいずれにおいても、配偶者への自己開

表2 各対象への自己開示とコミュニケーションスキルの相関

	子育て期			中年期		
	配偶者	友人	職場の人	配偶者	友人	職場の人
妻	.173**	.095*	.269***	.308***	.326***	.351***
夫	.249***	.233***	.194***	.302***	.287***	.303***

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表3 配偶者への自己開示と配偶者との心理的共有の相関

	子育て期		中年期	
	妻	夫	妻	夫
受動的共有	.450***	.215***	.359***	.221***
能動的共有	.432***	.205***	.378***	.164***

*** $p < .001$

示と高い相関がみられ、特に妻にその傾向が強くみられた。

以上より、配偶者を含む親しい者への自己開示とコミュニケーションスキルとの関連、および配偶者への自己開示と配偶者との心理的共有度との関連から、本尺度の妥当性はあるといえよう。

3. 配偶者と他の対象への開示

配偶者への開示では、特に家族に関する話題で大きな性差がみられたが、他の開示対象ではどうであろうか。また、配偶者に開示することと他の対象へ開示することには関連がみられるだろうか。

性とライフステージによる差異 各開示対象ごとに尺度得点を算出し、性とライフステージ（検定結果ではステージと略記）による2要因の分散分析を行った。結果は表4に示す通りで、それを図示したものが図2である。

配偶者への開示では、ステージ差はなく性差のみだった。友人への開示では、ステージ差、性差ともにみられ、特に性差が著しかった。職場の人への開示では、やはりステージ差、性差ともにみられた。

このように性差はいずれにおいても大きいですが、特に職場以外の友人では夫の開示が妻に比べて極端に少なく、職場を離れての親密な友人関係が少ないことを示唆している。その一方で、職場の親しい人への開示も少なく、特に中年期の夫では個人的な事柄に関わる自己開示は少ない。また、ライフステージによる差が友人、職場の人でみられたにもかかわらず配偶者ではみ

表4 性とライフステージによる自己開示の平均値（SD）と分散分析結果

	子育て期		中年期		F 値		
	妻	夫	妻	夫	性別	ライフステージ	交互作用
配偶者 (N = 1567)	18.82 (4.08)	17.01 (4.33)	18.56 (4.36)	16.57 (4.40)	$F = 77.47^{***}$	n.s.	n.s.
友人 (N = 1546)	17.20 (4.20)	13.12 (4.33)	16.12 (4.65)	12.34 (4.34)	$F = 305.66^{***}$	$F = 16.99^{***}$	n.s.
職場の人 (N = 1221)	15.65 (4.43)	13.24 (4.17)	14.64 (4.68)	12.32 (4.28)	$F = 83.38^{***}$	$F = 13.90^{***}$	n.s.

*** $p < .001$

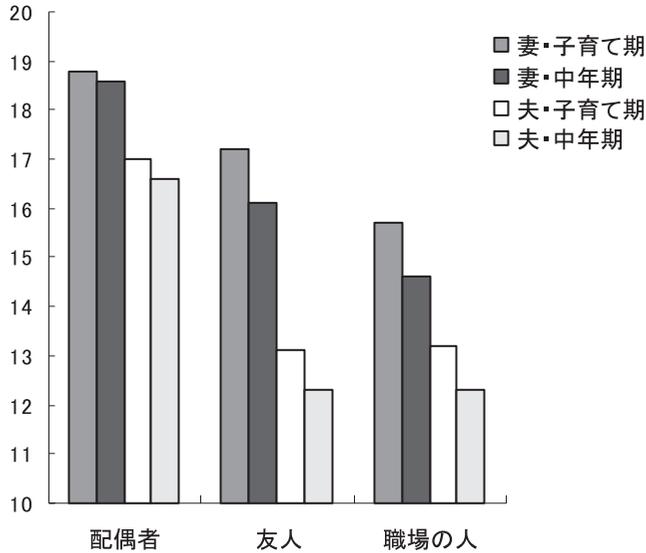


図2 性とライフステージによる各対象への自己開示

られないことから、中年期では妻・夫とも配偶者への開示に集中していることが考えられる。

開示対象間の相関 配偶者とそれ以外の人への自己開示の関連をみるため、開示対象間の相関をみた。結果は、表5に示す通りである。

妻では、職場の人と友人との相関が、配偶者と他の人との相関より高く、配偶者への開示と他の人への開示が区別されているがうかがえる。これに対して夫では、第1に、開示対象間の相関が非常に高いこと、第2に、妻でみられたような開示対象間の相関の違いはみられないことから、配偶者へ開示する夫は他の人へも開示し、配偶者へ開示しない者は他の人へも開示しないということがいえよう。

表5 開示対象間の相関 (対角線右上：妻, 左下：夫)

	子育て期			中年期		
	配偶者	友人	職場の人	配偶者	友人	職場の人
配偶者	—	.243***	.226***	—	.368***	.235***
友人	.457***	—	.441***	.420***	—	.445***
職場の人	.513***	.574***	—	.459***	.577***	—

*** $p < .001$

4. 夫婦のコミュニケーションと関係満足度

夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響を、妻と夫、子育て期と中年期で比較する。夫婦のコミュニケーションを、夫婦の会話時間と配偶者への自己開示の2側面からとらえ、それらを説明変数として夫婦関係満足度にどの程度寄与するか、個人内の影響過程のみならず、夫婦間の影響過程についても、ペア・データを用いて検討を行った。方法は、妻・夫そ

それぞれの夫婦関係満足度を目的変数とする変数一括投入法による重回帰分析である。変数間の相関は、表6に示す通りである。分析結果を図3に示した。

なお、会話時間と夫婦関係満足度について、性とライフステージを要因とする2要因分散分析を行ったところ、会話時間では性差はなく、ライフステージによる差がみられ ($F(1,1547) = 4.59, p < .05$)、子育て期より中年期の方が会話時間は長かった。夫婦関係満足度で

表6 変数間の相関

	子育て期					中年期				
	妻会話	妻開示	夫会話	夫開示	妻満足度	妻会話	妻開示	夫会話	夫開示	妻満足度
妻会話	—				.514	—				.478
妻開示	.470	—			.560	.509	—			.544
夫会話	.583	.321	—		.299	.551	.384	—		.315
夫開示	.357	.369	.430	—	.272	.394	.472	.474	—	.365
夫満足度	.300	.269	.360	.297	.484	.237	.324	.316	.434	.452

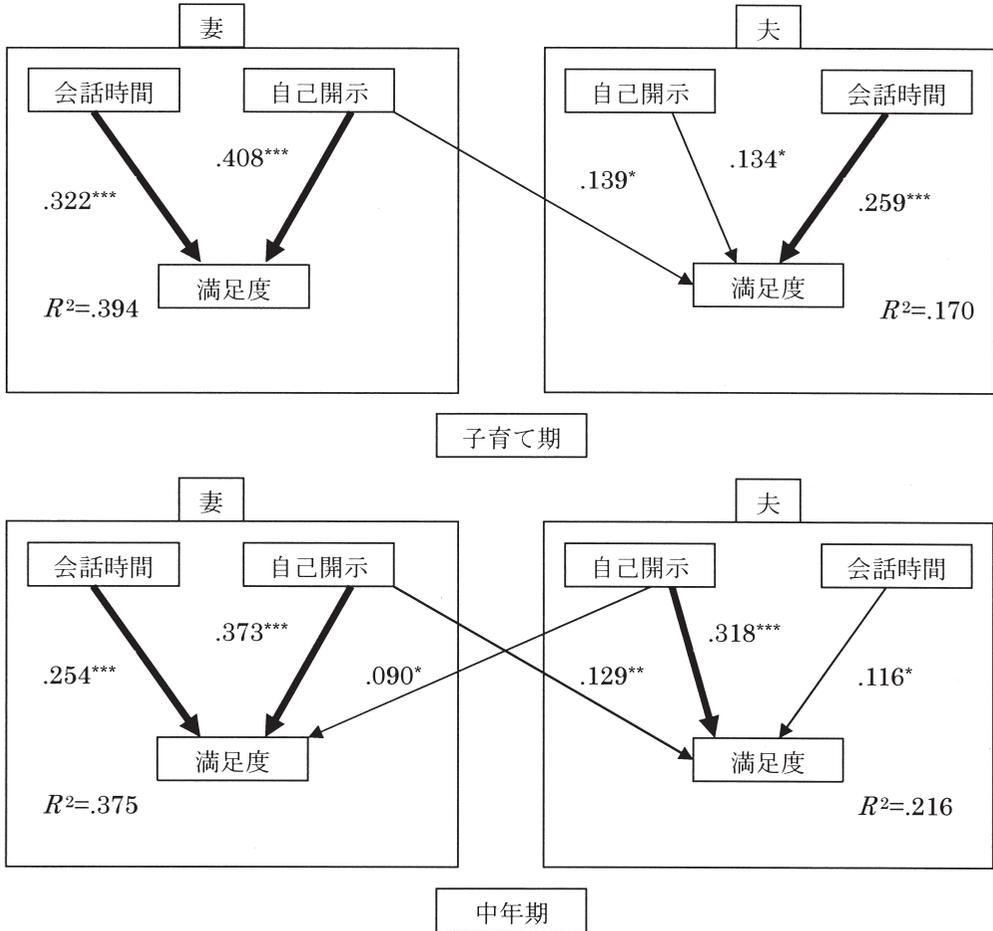


図3 夫婦のコミュニケーションと関係満足度の重回帰分析結果

は、性差 ($F(1,1545) = 32.31, p < .001$)、ライフステージ差 ($F(1,1545) = 15.64, p < .001$) がみられ、妻より夫で、子育て期より中年期で夫婦関係満足度は高かった。

図3をみると、子育て期の妻では、会話時間と自己開示が関係満足度を大きく規定している。これに対して夫では、会話時間が満足度を強く規定しているが、自己開示からのパスは妻に比べると大きくない。その一方で、妻の夫への開示が夫の満足度を規定していた。

中年期の妻では、子育て期の妻と同様、会話時間と自己開示が関係満足度を大きく規定しているが、いずれのパスとも子育て期よりは弱い。他方、夫では、子育て期と異なり、会話時間より自己開示が満足度を強く規定していた。そして、子育て期でみられた妻の自己開示からのパスに加えて、夫の自己開示が妻の満足度を規定するという双方向性がみられた。

これらの結果をまとめると、妻では、中年期より子育て期の方が会話時間、自己開示とも関係満足度への寄与が大きく、夫とのコミュニケーションが保障されることが関係満足度を高めるといえる。一方、夫では、子育て期は会話時間が、中年期では自己開示が関係満足度を規定していた。妻の夫への自己開示はいずれのライフステージでも夫の関係満足度を高めていた。

また、ライフステージの特徴をみると、子育て期では、妻は夫とのコミュニケーションにより関係満足度が大きく規定されるが、夫は妻とのコミュニケーションにあまり規定されない。ところが中年期になると、夫の妻への自己開示が自身の関係満足度に大きく寄与するのみならず、妻の満足度にも寄与し、夫にとって妻とのコミュニケーションが重要な意味を持つといえよう。

考 察

1. 配偶者と他の対象への自己開示

これまで自己開示の研究は多いが圧倒的に青年期に偏り、成人期の研究は少ない。本研究では特に配偶者への開示に焦点を当て、検討を行った。本研究で用いた自己開示尺度は、項目数も少なく非常に簡便なものだが、コミュニケーションスキルおよび夫婦の心理的共有度との関連がみられ、信頼性・妥当性ともに確保されている。まず、コミュニケーションスキルとの関係では、親しい者への開示、なかでも最も親密な関係にある配偶者への開示であってもコミュニケーションスキルが関係し、スキルの高さが開示のしやすさにつながるのだといえる。しかも両者の関係が子育て期より中年期で高いことから、スキルが開示を促すだけでなく、結婚生活の中での開示経験によりスキルが高められるということが考えられる。

一方、夫婦の関わり合い方としての心理的共有度と自己開示との関係では、自分の領域に入ってもよいという受動的共有、相手の領域に入り込みたいという能動的共有いずれにおいても、配偶者への開放性の高さが自己開示と結びついていた。相手と関わり合いたいという志向性が積極的な自己開示を促すと考えられる。しかし、夫では、心理的共有度は妻と同じか（能動的共有 ($t(1536) = 1.26, n.s.$)）、妻よりむしろ高いものの（受動的共有 ($t(1537) = 3.90, p < .001$)),

そのことが妻ほどには自己開示と結びついていない。夫は妻と関わり合いたいという気持ちはあっても、言葉に出さない・出せない者が多いということかもしれない。

次に、配偶者を含めた日常の親しい人々への開示度をみると、女性は配偶者に特化せず、友人あるいは職場の人に対しても自己を開示しているが、男性は、友人にも職場の人に対しても、個人的な事柄についてあまり話をしていない。特に中年期の男性ではそれが著しい。男性は他者に自己開示したり、感情表出することが一般的に抑制され、否定的に評価されるため（Pearlin & McCall, 1990）、結果として自己の感情を表出したり自己開示できるのは、ネットワークの中の数少ない女性である恋人や配偶者に限定されるというのが（稲葉, 2004）、本研究はまさにこのことを実証したといえよう。榎本（1997）も、女性と男性では自己開示に関する社会的規範が異なり、男性における高开示者は肯定的に評価されないという。そのため既婚男性にとっての開示対象は、配偶者である妻に限定されがちである。実際、ライフステージによる差をみると、友人、職場の人への開示では、中年期の夫は子育て期より開示度が低いのに、配偶者への開示ではその差がなくなることから、中年期には夫婦間の開示に集中しがちであり、特に男性でその傾向が顕著である。

しかし、その配偶者への開示でも、個人の開示傾向という点からみると、開示対象間の相関から、女性は配偶者への開示とそれ以外の人とは区別されているが、男性では三者間の相関がいずれも高く、配偶者に開示する人は他の人へも開示し、配偶者に開示しない者は他にも開示しないというように高い一貫性が見て取れる。自己開示における性差は中学生の段階で明瞭になり（渋谷・伊藤, 2004）、その差は年齢とともに拡大するという（榎本, 1997）。男性における高い一貫性は、性役割期待を読み取ることにより習得された開示傾向の個人差といえることができる。

2. 夫婦のコミュニケーションと関係満足度

夫婦のコミュニケーションを、物理的側面として会話時間、心理的側面として自己開示という2つの側面からとらえ、それらが夫婦関係満足度をどの程度規定しているかをみた。その結果、以下の点が明らかとなった。

まず、妻にとって夫婦の会話時間と夫への自己開示は関係満足度を規定する非常に大きな要因であり、とりわけ子育て期ではそうだった。既婚女性にとって夫婦関係満足度は主観的幸福感を規定する最も大きな要因であり、なかでも専業主婦にとってその良否は精神的健康を大きく左右する（伊藤・相良・池田, 2004）。それゆえ子育て期にある無職の妻にとって、夫とのコミュニケーションが物理的にも心理的にも保障されないと、夫婦関係満足度の低下を介して精神的健康の低下を招き（伊藤・相良・池田, 2006）、抑うつや育児不安につながるということができよう。

ところがこれとは対照的に、子育て期の夫は妻とのコミュニケーションに満足度があまり左右されない。また、自己開示そのものよりは会話時間の方が効いていた。子育て期の夫婦

関係と疎外感の関係をみた伊藤ほか（1999）でも、妻との会話時間の増大が、情緒的サポート対象として妻を選択することにつながり、そのことを介して夫は疎外感を低下させており、子育て期には夫にとっても夫婦の会話時間の確保は重要だといえる。しかし、自己開示することは、妻と異なり夫婦関係満足度にあまりつながらない。

だがそれも中年期になると様相を異にし、夫は妻に自己開示することによって関係満足度を高めるようになる。先述したように、一般に男性は自己開示することが期待されず、高開示者は否定的に評価されるため（榎本, 1997 ; Pearlin & McCall, 1990）、社会生活を重ねるなかで男性はますます自己開示しなくなり、それが本研究の中年期の夫の（配偶者以外の人への）自己開示の低さにつながっていると考えられる。その結果、自己開示できるのは唯一配偶者のみとなり、実際、他の開示対象に比べれば妻への開示は突出していた。そうした妻に開示すること・できることが中年期の夫の関係満足度を高めているのだといえよう。

しかも、妻の自己開示が夫の関係満足度を高めるというクロスオーバーな影響は子育て期でもみられたが、中年期はそれに加え、夫の自己開示が妻の関係満足度を高めるという双方向性のクロスオーバーな影響がみられた。日本の夫婦では、「役割としての関係」が成立していれば夫婦関係は維持されるが、その満足度の高低を左右するのは「個人としての関係」の質といわれる（池田・伊藤・相良, 2005）。中年期には、親役割を果たし終え、子どもという媒介要因がなくなっても、夫婦が個人としてコミュニケーションできることがことさら重要になってこよう。

最後に、コミュニケーションを通してみた夫婦の関係を、2つの時期を比較しながらその変化の過程を振り返ってみたい。まず、子育て期の妻にとって、夫と会話する時間の確保と話を聞いてくれる夫の存在が非常に重要であることがわかる。それに対して夫は、会話時間の確保は重要だが、妻への開示はあまり重要なウエイトを占めない。それが中年期になると、妻にとって夫とのコミュニケーションは、子育て期とは話題の中身こそ異なるが、その重要度はあまり変わらない。しかし、夫では、夫婦間の自己開示、すなわち話を聞いてくれる妻の存在が重要になってくる。子育て期に夫が仕事の多忙さを理由に妻の話に耳を傾けることをせず、それぞれの役割に没頭してコミュニケーションする十分な関係を築けないでいると、多忙な時期を過ぎ、仕事の先も見え始めた中年期になってから、家族や妻と関わりを持とうとしてもうまく行かないことはこれまでも多く報告されている（池田, 2000 ; 伊藤, 2006 ; 難波, 1999 ; 吉村, 2002）。本研究で、中年期の夫の妻への開示が夫自身の関係満足度と強く関連する背後には、妻と関わりを持ちたいと思っても、うまく開示できないために良好な関係が築けない夫の存在が多数あることを示唆している。夫婦にとって会話がプラスに機能する1つの理由は、夫には自己開示や感情の解放の機会となり、また、妻は会話を夫が自分たちの関係に配慮している証拠ととらえるため（Belsky & Kelly, 1994）という違いはあるが、男性にとって妻に開示すること・できることは、精神的健康を維持する上で重要な要因なのだといえよう。

注

- 1) 子育て期Ⅰの回収を郵送にしたため、回収率が28.1%（配布数約700組）と極端に低下した。そのためデータを追加する目的で子育て期Ⅱ（同約400組）の調査を行った。
- 2) 調査にあたっては、対象者本人に回答してもらうよう依頼し、対象者が不在の場合は片方の回答だけでもよいことを依頼文に記した。また、調査票を妻票と夫票で色分けし、間違いが生じないように配慮した。さらに、夫婦で回答が得られた場合はペアごとに回答をチェックした。

引用文献

- Belsky, J., & Kelley, J. 1994 *The transition to parenthood*. New York : Bantam Doubleday Dell Publishing Group, Inc. 安次嶺佳子訳 1995 子供をもつと夫婦に何が起こるか 草思社
- 遠藤由美 1997 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, 68, 387-395.
- 榎本博明 1987 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 平山順子・柏木恵子 2001 中年期夫婦のコミュニケーション態度—妻と夫は異なるか？ 発達心理学研究, 12, 216-227.
- 平山順子・柏木恵子 2004 中年期夫婦のコミュニケーションパターン—夫婦の経済生活及び結婚観との関連 発達心理学研究, 15, 89-100.
- 池田政子 2000 夫婦関係とジェンダー・ギャップ 伊藤裕子（編）ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房 Pp.183-208.
- 池田政子・伊藤裕子・相良順子 2005 夫婦関係満足度に見るジェンダー差の分析—関係はなぜ維持されるか 家族心理学研究, 19, 116-127.
- 稲葉昭英 1999 有配偶女性のディストレスの構造 石原邦雄（編）妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク 東京都立大学都市研究所 Pp.87-119.
- 稲葉昭英 2004 夫婦関係の発達的变化 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子（編）現代家族の構造と変容 東京大学出版会 Pp.261-275.
- 伊藤裕子 2006 妻の結婚・夫の結婚—夫婦関係に見るジェンダー・ギャップ 伊藤裕子（編）ジェンダー・アイデンティティ 現代のエスプリ別冊 至文堂 Pp.152-164.
- 伊藤裕子・池田政子・川浦康至 1999 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響 心理学研究, 70, 17-23.
- 伊藤裕子・池田政子・相良順子 2003 職業生活と家庭生活が夫婦の心理的健康に及ぼす影響—ジェンダーギャップの視点から 平成13～14年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2004 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響 心理学研究, 75, 435-441.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2006 夫婦のコミュニケーションと関係満足度、心理的健康の関連—子育て期のペア・データの分析 家族問題研究（聖徳大学家族問題相談センター紀要）, 4, 51-61.
- 岩井紀子 2002 結婚生活は幸せですか 岩井紀子・佐藤博樹（編）日本人の姿—JGSSにみる意識と行動 有斐閣選書 Pp.9-15.
- Jacobson, N.S. & Moore, D. 1981 Spouses as observers of events in their relationship. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 269-277.
- Jourard, S.M. & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.
- 門野里栄子 1995 夫婦間の話し合いと夫婦関係満足度 家族社会学研究, 7, 57-67.
- 柏木恵子・平山順子 2003 夫婦関係 児童心理学の進歩 2003年版 金子書房 Pp.85-117.
- 数井みゆき 1995 親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較 家庭教育研究所紀要, 17, 73-83.
- 川浦康至・本田時雄・池田政子・伊藤裕子 1993 世田谷区の女性に見る生活ネットワークのひろが

- り—家族・近隣・社会 世田谷女性センターらぶらす調査研究報告書
- 菊地章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 木下栄二 2004 結婚満足度を規定するもの 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子（編）現代家族の構造と変容 東京大学出版会 Pp.277-291.
- 諸井克英 1996 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.
- 村松十和 2006 育児中の母親の心理（衝動的感情と育児不安）と夫との関係に関する研究 三重看護学誌（三重大学医学部看護科）, 8, 11-20.
- 難波淳子 1999 中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての一考察—事例の分析を通して 岡山大学大学院文化科学研究科紀要, 8, 69-85.
- Pearlin,L.I. & McCall,M.E. 1990 Occupational stress and marital support. In J. Eckenrode, & S.Gore (Eds.) *Stress between Work and Family*, Pp.39-60, New York: Plenum Press.
- サントリー不易流行研究所 1999 ミドル世代の生活実感調査, Vol.1, ミドル世代の夫婦関係 同研究所 Pp.1-14.
- 施 利平 2000 国際結婚夫婦におけるコミュニケーションと婚姻満足度 ソシオロジ, 44, 57-73.
- 生命保険文化センター 1995 夫婦の生活意識に関する調査—夫婦の相互理解を求めて（財）生命保険文化センター
- Shelton,B.A. & John,D. 1996 The division of household labor. *Annual Review of Sociology*, 22, 299-322.
- 渋沢田鶴子 1994 夫婦関係 岡堂哲雄（編）つれあいの心理と幸福 現代のエスプリ 別冊 至文堂 Pp.105-115.
- 渋谷郁子・伊藤裕子 2004 中学生の自己開示—自己受容との関連で カウンセリング研究, 37, 250-259.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 1997 夫婦間の親密性の評価—自記入式夫婦関係尺度について 精神科診断学（日本評論社）, 8, 155-166.
- 詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介・小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則 1999 夫・妻の抑うつ状態に影響を及ぼす夫婦間の愛情関係について 性格心理学研究, 7, 100-101.
- 徳田由紀子・伊藤裕子 2004 インターネット上の育児ネットワークが母親の育児意識に及ぼす影響—夫・友人との比較を通して 児童学研究（聖徳大学児童学研究所紀要）, 6, 65-73.
- 土倉玲子 2005 中年期夫婦における評価ギャップと会話時間 社会心理学研究, 21,79-90.
- Vannoy,D. 1996 Gender stratification and love relationships in marriage. In M. T.Segal, & V.Demos, (Eds.) *Advances in Gender Research*,Vol.1, Pp.15-46, London : JAI Press.
- 吉村和久 2002 妻には、言えない 主婦の友社

(2007.12.12 受理)